

1 授業の見方・考え方を達成するための手立てについて

(1) 気付く学び

導入時に震災の時の写真を使い非常時の心情に意識を傾けさせる手法をとったが、選りすぐされたもので映像自身に力があつた。結果、一気に生徒は震災時の被災者の気持ちへ意識を持つことができた。動画を用いることでさらに臨場感に迫れたかもしれない。また、ここではあまり時間を割かなかつたが、じっくり時間をかけ生徒の意見を発表させるなどすることで震災時の被災者の心情を想像させることを狙った授業校生も考えられた。

今回の数学科での取り組みは、単元の導入時に、気づく学びを目的とした1時間の授業を実践した。標本調査と全数調査の違いに気づかせる授業であつたが、「調査とは何か」といった大変広い意味の言葉から生徒が想像する調査を挙げさせ、その1つ1つの意見を全体で話し合いながら、広義の調査から統計調査へと話を進めたことから、生徒主体の生徒の発想から課題に迫ることができた。しかし、今回は統計調査への絞り込みからさらに標本調査と全数調査の関係性の議論が教師主導になってしまった。たくさん出た生徒の発想する調査を「こんな分類は」など視点を変えさせる補助発問の工夫が必要であつた。

生徒が自らの問題として課題への気づきをさせることで、2時間目以降の授業により影響を与えることができると考えられるので、1時間を割いた気づく学びは大変有効ではないだろうか。(検証なし)

(2) 深化する学び

班での話し合いを一通り終えたタイミングで他班の意見を覗き見て、班で再度話し合いをさせることで自分たちだけでは気づくことができなかつた新たな視点を発見することができた。なぜこの考えをもつたのだろうと自分たちになかつた考え方を話し合う場面もあり、多面的・多角的な視点を導入することの良さに気付かせることができた。やや理由が鮮明にならない班もあり、「理由を明確にしよう」や「優先順位を決めよう」などの補助発問で気づきにくい理由を考えさせ、より多面的な考え方が促せた。また、今回はアイテムの数を限定した試みであつたが、実際に避難時に持ち運ぶリアル感を持たせることで、重さなど量的な制限をかけた話し合いをさせることで、新たな視点で議論することができただろう。このように、気づく段階で、よりリアル感を持たせることで、より実際の場面を考えることでより多面的・多角的な視点で論ずることができたと考えられる。

(3) つながる学び

振り返りの時間を十分に持つことが難しかった。

2 3学期の研究実践の成果と課題（その授業の見方・考え方に迫れたか）

班での話し合いの場面では、各自が自自分の考えを発表しあい、仲間の意見に耳を傾け、うまくまとめ、発表することができる。肯定的に（批判しない）のルールの特長ではあるが、意見を精査し、より良い考えを集団で思考する深い学びへ進める上ではデメリットになっているのかもしれない。意見を真逆の立場で考えたりする中で、意見の矛盾や欠点が見えたりすることで深い学びにつなげるためにも健全な批判力とこれを肯定する議論の仕方までもっていく必要があるのではないだろうか。